

近江輿地志畧

二十二

冊數	番號	部門
五	一四	三
六		
七		

新志稿所久

道臣國輿地志考記卷之八十八

伊香郡 第一

史以伊香ノ名諸書ニ載モトモ土俗傳ノ説同ニシテ
古傳天智天皇ノ御代多所行幸五而ナリカガリナリ
其支々と御役の更見多々有る故五百ナリカガリナリ
五百の面とナリといひて強といひて御くも五百の面と
いひう御五百の御統言形と申すの面と書いて
いふこと御守りもあらず次五十の字といひう御守を
ひつゝか歴正史文獻及源氏物語等に多矣
足卑竟多中多事之源也假令五百中十の事より

前引と天人遙説教故り也て郡の名とまつり
ひとかし形を仍ね水に偏るべし次一説曰は古より
の比と云ふありてよき事ひと申じて今見之多考
考かう左は吳秀郡とよばれ伊秀の事にいたり
是もすくいやまく形の面郡と伊秀郡治令不詳の
地形れど郡の名は伊秀郡奥神社以て因て
郡名と改延喜式の神名帳と伊秀奥の社のことを載ら
さきノイ青天人遙説教本是秀の事とあす事記述
ナリ伊秀奥とすとてといなしく別次江家次アシキ伊
美の事は後漢書と云ふ事あくびの事とアラシ一
人ノル子ノ形

高郡東と高原の國界中尾嶺土毛嶺金福嶺玉文
山と旗嶺の毛嶺と中嶺山と連山毛嶺と清井
郡の名と極まり凡ての郡の地勢あれどをして東西
人ノル子ノ形

伊秀山 以前きの山と捨て名はくへまること伊秀郡
中の山とすとく伊秀山形は恐ろ形ノカタ左
右よむ

万葉集

伊秀山野山同音者有其者ナニカアトヒルフテレシノノミツ

躬恒家集

寺のノ望事トカシテ引一也ハナテ秀比イソルズアサ

伊畜浦 前回

後類高基

シムヤモモトモヤ人ひいそくらん候の浦シモモロアシモ
伊畜浦 前回

右大野類

リシノト一後ト伊考アリカムシマシヤヘとモモアシモ

笛取莊

行彦郡の南エミ前ノテ津平郡モヒテ

東字根村笛取莊の南の界シマ

西字根村東口字村ノシマシ

東口字村 西字根ノシマシ

高月村 東字根村ノシマシ

大高寺 高月村ノシマシ

觀音寺 四村ノシマ

裏布村 高月村ノ東ノシマシ月川ノ傍

高月川 或ノ高月村ノシマシ月川ノ傍

或ノ高月村ノシマシ馬上川ノシマシ水原ノ稱名更名

之を高月川モト中門口安間ノシマシ流か曲流更名して流
事ノ下ノシマシ月川ノシマシ馬上川ノシマシ降下ノ事次第上村

ノシマシ川ノ八十間半水四十間計合小村ノシマシ

彦川村

彦川村のわよみ

觀音堂

彦川村ヨウイノサムシニテニホセタリトモスル

馬上村
彦川村。東ノアリ
モキナリ。トモクナリ。モハシナリ。モハシナリ。

馬上村
彦川村。東ノアリ
モキナリ。トモクナリ。モハシナリ。モハシナリ。

支流

彦川村ヨウイノサムシニテニホセタリトモスル

觀音堂

彦川村ヨウイノサムシニテニホセタリトモスル

天滿天神社
日村裏の間ノアリ。若宮の御子アリ。若宮の御子アリ。

天滿天神社

日村裏の間ノアリ。若宮の御子アリ。若宮の御子アリ。

去自造子

彦川村ヨウイノサムシニテニホセタリトモスル

柏原村

彦川村ヨウイノサムシニテニホセタリトモスル

西志久村

柏原村ヨウイノサムシニテニホセタリトモスル

藏座寺

西志久村ヨウイノサムシニテニホセタリトモスル

保延寺村

西志久村ヨウイノサムシニテニホセタリトモスル

柏原村

西志久村ヨウイノサムシニテニホセタリトモスル

茎原堂

西志久村ヨウイノサムシニテニホセタリトモスル

白山權現社

日村裏向ノ

丹口村

西志久村ヨウイノサムシニテニホセタリトモスル

天神社

井口村ヨウイノサムシニテニホセタリトモスル

理宣院 日村よりすとまふ井口彌正蕃院五とよ

井口彌正屋神社 日村よりす干今上御油トヤー

田満寺阿弥陀堂 日村よりお伊ふ古昔もちと傳ひ
持ち奉せーと云々阿弥陀堂のとある

尾山村 持ち村の本

井出神社 尾山村より大井と云井水の上よりお傳
井口彌正娘井水引を多め人程入るを多と不神波

安樂寺大日堂 日村よりお傳ふ古昔も伽藍取

支今終て大日堂不つを付青色膏ひを東より傳ひ
持昌せーと云詳色青の縁起より

内戸村 尾上村の本

石道村 内戸村の本下へと上川の本

石道寺 石道村より八所奥よりすとまふ石
道寺へとゆく是法上人の塚墓傳敷大師の再興寺す今
一山に三寺の寺の付名は華曼八處於二十四院の
天竺國より持来さる之ゆえ乾隆永正年中觀音僧
少紀中石道寺の縁起より考へて之を記

欲令特蒙十方檀那助成修造江州伊香郡己高山
石道寺舍破壞狀

竊以當寺者延法上人之間闡傳教大师之真也然草創
之後延曆之比大師攀己高山嶺建石道場為天台之別
院以摸巖岳之風範為桓武之御願以呈教信之懇篤
從爾已降頃教密教之練行薰修年舊遞那止觀之
學業鑽仰日新一字之阿弥陀堂者根本之建立五間之
觀世音堂者中興之梵塲也被宗樂邦刹之教主此安
若界濁世之能化二聖之本願淨穢雖異二利之大道凡
聖無差又大師自穿千丈之巖石忽湧一流文靈水併

是穿鑿於高原之相顧己高山決定知近水之理示古
道寺者辛亥夫佛閣延文曰福應安再造後久無終
神之造營因花棟梁頽毀而礎石埋青苔蠶蘚零落
而椽梠侵白霧荒簾之露路僅歛泣深洞之風含悲聲
于時小僧光澄頃年居住當山今舊廢塲之節爭無
憊難之思半寢食嗟而有餘造次思而無益不如早上
達天聽下諳萬戶勵修造之大營肆聊述微志於魯
愚之觀流欲成大願於貴賤之助力七珍之貪一紙之施
不論多少不繢輕重各行隨分檀度者蓋遂成風之
大功乎然則興善之緇素結緣之道俗現世共超羣

頓之福庭當來同遊弥陀之樂臺矧也已高無位兮永
學台嶺立時之教石道無碑兮鎮奉」祈 皇圖万
歲之化尊仍所勸志趣如件

永正七年七月日 沙門光澄敬白

小山村 石道村の南ノ山ノ村

三野村

尾山村の南ノ山ノ上ノ村と隣て南ノ村也

滿願寺藥師堂

三野村ノ竹お付古昔ニニニ葉

茶の木に草木を育むを化すと今御薬師寺の本堂也

東和新村 清春ノ村ノ西ノ山ノ村也

觀音堂 东和新村ノ北ノ山也

西物部村 東和新村ノ西ノ山也

横山村 西物部村ノ少西ノ山也

横山大明神社 横山村ノ山也 一村の主神也神那ノ延喜

主神名帳 並置横山の神社是也

唐川村 横山村の西ノ山也

涌出村 唐川村ノ有主ハ方木ノ主也ノ山也中ノ山也

もつて土佐れに一夜を涌出も山也ノ山也中ノ山也

ぬゆきをぬく好幸の者より宿を設けたり也

之が西本山一年の内ニ二度其の栗山ノ山也

もと年の中を度すをまつてニ月ニ度り也

觀音堂 唐川村より涌出する林水

養活院 日村より 禅宗菩薩洞院の事寺耶季

洞喜院 二世吉岩空禪師冥闇の地

起照寺 日村より 海云真宗或老昌ちと作。

龜野村 東阿國村の西面に餘所川を隔て西多村

正

西野村 銀葉村より之村

松尾村

多世村の西側より之村

御龍淨宗社

松尾村より黑軍正らと云ハ兩を以て

必致何り

一
一
一

片山村

鶴原村の西側に村

郡莊

高木庄の西側に村

西押雲村

而北村の東側に餘所川の支流を以て

帶塚

柳生中村より舊古有大寺社の祭祀十日酉

引ノ鶴と云塚に達る也 と云古傳もひき塚と云ひ名

東柳原村 柳原中村の東側

西阿國村

柳原中村の西側

瑞雲寺

柳原中村の西側に之村

童藏寺

城之村より支流河形

志那之社以神社 日村主

觀音堂

守玄集

喜雨亭記

卷之三

卷之三

西徳寺 村上屋
本庵村上山の古昔より地主を此家
寺と云ふ禪寺也。小名山若城の後も寺と云ふ。蓋ては、一
向まの傳徒もつて一寺と建立し而徳寺と号す。一村は
一向宗の傳承也。

重刊

中莊村

西府
赤尾村
少
年

大畜

大清大明秘社

卷之四

卷之三

卷之三

の奉祀とひて圖系の事由と體うてテスハ天神立
ウ初國奉立の中をハ天御中主神と号すより神十代
の孫をハ天御中根尊と号す以て根子を御の孫をも
ト御津後命と云是を南社の御神形也神立代の
御女天照大神天の石室ト入リテ盤座を因ちテ
此火御根命トモトの初御と改めて大神盤座とも御
事令レモ。端坐の縄と名ア乃レ清めて曰勿護還草
一木をモルモトモ中臣彦奈の御事と主より源ナシ
ホシモリ此ノレモ代々、國王の迎侍と傳ヒテ今ヨカリモ
後承五家つモナリ。由來モト久シ。 御事津後命南

行法をした。まことに上垂別七瀬水の田里、無
一處邪國行をあたんが、法神の遊廻多不形。伊
勢津呂命下子孫、造て曰吾天体以五根り令之傳と
天體是辟伊良トモ久くも世間と復さぬより化として
高き奉代を渡シテ即ち苗那傳焉と名す。主事
の右形。又人至四十九天武天皇白鳳十年三月と
伊勢高福基原と後柳井て名の地に封更乞う。承く
者高柳と右形。一年弘法大师法門寺徳厚にて神
木守草の區もしてあるまえとしむ。那一花比神矣
御年と云つて號て勅念より奉り久く御奉月の時

勅すら口當つて一女多も現して社の五畔とする
大師往しと申す。古にあれ斯地の神なり上人
偶々見て法施ノ事有れど幸運ノ事福ナリ形ノハ上
人より江隈^{ラワイ}を改めて須津を御^{アサヒ}必^{アシ}吉。本体を
知りソレ已つともんと欲^{アシ}大師復甲^{アシタ}神ノ^{アシタ}
シテ止^{アシタ}矣^{アシタ}此^{アシタ}の乾陽^{アシタ}者^{アシタ}即ち是が
之^{アシタ}也^{アシタ}復^{アシタ}大師神^{アシタ}後^{アシタ}山^{アシタ}を
攀つ^{アシタ}清水^{アシタ}と涸^{アシタ}泥泥^{アシタ}の^{アシタ}御^{アシタ}為^{アシタ}抱^{アシタ}水^{アシタ}易^{アシタ}累
之^{アシタ}地^{アシタ}藏^{アシタ}蘿^{アシタ}の^{アシタ}縁^{アシタ}を^{アシタ}立^{アシタ}矣^{アシタ}人形^{アシタ}や被^{アシタ}神
其^{アシタ}善^{アシタ}後^{アシタ}半^{アシタ}身^{アシタ}と云^{アシタ}也^{アシタ}而^{アシタ}神^{アシタ}と達^{アシタ}神^{アシタ}

もてはや教え人皇五十九代 宇多天皇享平七年
をも草家が奉事すと後て南社と對ひて獻信と
仰そく、是に草家も法衣冠を以て禮を書
宝殿をもむし昂らし勅願を仰て曰正一位熟一年方社
の太陽神 金剛真印菩薩と又昌泰二己未は年四
月二十九日と以て參礼とぞむ封多喜く仰そくと之より
於度の參禮とぞくと高く奉る所人也く天正年
中紫田猪家朝榮秀吉を尉爲の日神社と參りすも
て神経爲有となり參礼年中ニ二ナ四月四月廿四日
を隨一と以て四月廿四日の事と高社の參礼とぞくと

至る縁記とせらるるの信頼、あすこゝで採用しに

御きとも多くあり也を伊勢神社之命より延喜式神名帳

ヨ伊勢郡 伍吉吳の神社と云ひ社ナリニ年主ノ祿

子曰貞觀元年正月二十七日甲申控迎江主役位上勅

八等侍者神從四位下貞觀八年閏三月七日壬子控迎

江國從四位下勅八等侍者神從四位上之、

天正寺 大音村ニ有

一長久庵 (口村ノ山)

寒川志畠卷之八十八終

近江國輿地志畠卷之八十九

臣
寒川辰氏編輯

伊香郡 第二

黒田村 大音村の東にありてある村也。金闇川比鄰あり
大津河谷を走り黑田村アリ。輕轎モト号。黑田村の内姓也。

蓋シテ少少人今人家四五十戸

一德光之長者墓碑まちにあり。去信和治之元年通余云
は徳光之長者墓碑まちにあり。去信和治之元年通余云
而そナリ。徳光之長者より別里町判官の墓なりと云。是
其俗名也。黒田の太祖佐々木忠高判官。高虎の生所なりと

半と詮外逃の説もあらぬとナリ。は墓碑考ノ文多吹不

實惠國主の墓ともひらり

千國村 愚國村の前にあつてある村なり

本町村　尾西村の東にあつた。毎年六月六日酉

高橋益の御市をすこしおみ

傳信寺 本草林子 世に所傳本草之卷

寺能登守也後豐後守之安國大作
云方義昭始以重活して小源院宗近、太刀及鳥目
守と並治を手取て之を紀す。續紀曰江別傳舊教
本布村長河山淨信寺地名著多處の子孫也南天主
教樹蓋隆の附記す。天武天皇北津守持傳也

の財物などもひたすらもくへ海中で金魚のえり、浦に
飛民も、ことをあやしくて付かうつと帝が率半ば地
蔵菩薩の像を絆たまでもうほんとうと云ふ。我佛の身
属とはいふ。あはれの世の衣生を廻さん、に免にちひる社中
身をそなへて、まことに心を入へて、まきおみゆけと云ひた
事で、墨韻をうるゝ、まことの心をうるゝは対
國の駿府の浦にまたさりとてたまう。帝がうかせあ
はれとて、事のことは被毛は法かに勅して駿府へはり、
しむさとく浦の岸へよ尋ね、渾人翁曰、酒日法中少
全焉のまをす。人をもとをあやしむ被毛をのぞむ

富士山高嶺の墓ともひらり
 千畠村 烏面村のあにうすてあく村あく
 本町村 五郎村つまたあく村あく 五年六月六日
 市場地盤の御日市をなして三歳
 淨信寺 本町村ふあく 世に所縁本寺地主とを定
 寺院多羅石地盤業豊長秀村は無事なり是村
 云方義空和尚も無病して小腹疾氣近つ太刀及鳥目
 本町村長所也淨信寺地盤業のそゆも南天王
 鶴樹蓋屋の形刻ケテ天武と曰ひ沙子持庫も題波

のは下りりたまくさく海中金龜のえり浦
 駆民も、まもあやしむ村からふく帝差年は地
 神芳院の像を拂、たゞももまきまく、我佛の身
 脇を拂、あ東風世の衣生を廻せんたれにち至る
 事を嘗て、更に三點入といまき若木代アニモア
 かまくも黒龍を以て、もとまく、其をうけ置
 國の御殿浦にまたまく、あたまく、事わくわがは
 くまもく浦の源へ尋ね漁人会同酒田浦中ふ
 金もみえまく人まもとあやしむ被毛ものえする

かゆく尋ふ長を今余の地をも候りて其の形と
意念を抱あらるに懷き事懸念ものにてまづ事
に言ふと上表と帝も又御感へて御役ノ靈
を御奉りまどの二号をしてまづに靈をゆく
坐法くは地ノ御役すゝも書院をもひて有りと
号してよしとえをひきあり故に金之長等と名付
かきはまづ御月卿をも神祇をほし御くつりまつめ長
者に被き執り白拂の清祓をなす道場の次金是比
入戸のあわうりと急拂をしてはあくも龍鼓立ち余

を起すくは地山より而入は有清祓迄とて
久の肩深ぶからひこよし縁をとて松風氣音をと
なし右の方を仰吹大手の拂またの方を金兵の入
ふさかる陰陽開闢用くれ地少陰道の阡少く旅人月
夜も見豈是也とすと清祓地蓋ま後を安敷其處
衣食をもくひたまつまの拂あひは地経も拂
波多像をあひと拂二世の利益をもあらうん
功徳事に先づとて帝へ奏へ奉る所而金車かニ
町の地をかぎ仰生を達すたまづ日暮てかく
すく行祭畢のとくにあらず地産を施すと聞を

時々白風三年七月十九日より伽藍のあふ老樹の柳
わざりへふ山寺を柳もよどひまもじ入は西はる
水木神社とよき伊勢守あるくまき御枝うすす
まき御理の神あり木分に二神皆天津彦命別高神
と奉ゆ清水を神水去平山の御神也和列吉野郡
にあともきたまし又佐若叶神也一社に祀る今は
所み法事しして本居大原神ともいひきす勢たまし
其處全え接あはれの帝峯天皇御神也アヒニ三年
の五月弘法大師け見ゆと感一通手にさだい玉衣
老跡一粒取一タマトモ三のたましくあ萼有はせ

徳御子御うどく御早起御被御身纏且假せいた
すかをほそじて後禪セシムと遙か事無事のひと
大の自綱朱金虎皮紙地御一紙三言を写す
自作の詩鏡等を宝殿下ちうらたまへもあり徳大院
看ぐく寶蓋の入にふれひ持てて人を觀て汝が
持せよとめらめら御理の入に別か物の力をもてく無能
を辱したまふ付毒蛇七八歳くすれまつと年
あるふはあ大臣のたまく汝いはくまくすくまく
外人をめ幸女のいとく汝、むすびとてゆすりとて
ふりとくとてゆすりとて夜をゆよソと食氣とう

は下もとよとせんのうへひあんそりきをせしり
やどち眼ふみんとしるかすととるく
ちゆのまほりく是も佛法の是れらんせきと人
くすりもよとて叫びして拂たまくまのときとま
かがりて水落うにゆうといきかうへはる平地
とまつたままであたまとむとをもきとすと
の所をあすありと名ばくろとけぬりまくあ
あゆむすのとすもしとソリゆくまもと拂う山
いづきをまくいじ業人を幸せの帝解砾天皇は實
昌泰二年正月吉日相公ニ勅しての事
江戸御中

地蔵菩薩は三像うそとその右て左に開くと是
瓈をくく膚ふとあもよ地ふ清と天下
泰年万民不争の所とあもへととて編とま
トトシトロヌとのとて柳中と金を差すと長轄
山廟住寺とゆだらすをほすもくけまくとえ
ゆは有ゆの大士獨せ捨身大尊ゆくと抜羣と
坐りあむりく説を教せさんあくとく坐をす
て貴妙釋尊とて信をもと教とく教むとく
すく威懾せばくとくとくもの金の是般舟

ゆ事
因村よりゆる

井口照神社 因村より左近お馬は古伊吹神

ソス怪異の者ソイハシモ傳モ傳年未記但命を
ミキモトノカミノ御内イ傳モ傳年未記但命を
以利歎すその是景を予すゆふ景イモ井口
大神トソイシニモ

河合村 本山村の東山にあり
大善村 河合村の南至馬戸の東山道にやあり

古移村 河合村の南至馬戸の東山道にやあり
法花寺 古原村西山に八町半奥に有り

寺事大寺あり其事五石圓塔也之成物也と云
端とけちの三層塔也と云ふ故に三層の塔有
南寺モ碑碑の事寺あり神使傳ヒ法花寺と号次
法花寺記曰人皇ニ辛亥年而僧了空の七年以降
菩薩威徳佛塔を行ひもどて日傳のちと勝化
ともと度慶勅行してますく威徳を得矣
是を名々山名也と名と是が產地也佛像を安
奉し而ま八代に亘る半終年國家を憲使と云
生と利益と云ふことに人皇甲子戊午年是日
祥子天平之年也云々とあらへ勅行せられ

まも星属と清にまよひもと東方津陽陰世界某
時の法會と連因を列し福の尊を仰り一宇は軍
庵と云ふて名とあるす誠に送迎の形像七
福の由はあらかじめ教説の首長曰序のを
候恭故供養して香花をさる時院をさへ言ひき
屬つあり承く乃江基督教の教義とくとく年
に達成はる文爲して化行により次江基督教の教
義にすりせくあくは神主経して聖母の尊徳と併
ちと法華をすくは傳教又天皇五十年延年
至是延慶年中傳教大師江基督教の職業をさへ

あくまがのま跡にはゆゑどそのやうあくと
えくまむとおふりケソレ聖主の尊徳と拂ひて服侍
の事務あるまことさく日立八月之ニ弘法を
仰り又伽藍僧房をうちたれかひびて性喜をも
ゆりて後延慶二十二年傳教ノ法をくく入東京
法してする御朝の傳教大師の嗣法をうけく寺
院薦易ふときあらじく弘法修業をく時
運に山毛と廢兵と感もろう傳教大師在化の後者
金戒をもきちく或も跡をもくまと強制せ
はれゆくも身内の院領法家の遠嚴とより押

てひまかくと清供をさへし候事むすゞ無儀
ソシテ御室の修復をあともんに絶發まであはせ
是るのうち身に立派和氣ありゆづれえども
自極志の教法をもめり聖をもむ所の風雅とぞよ
神変か鷲の應声威過不思議の技もふゝ南山麿
あやめうゝ頗る修神の者と仰せられても淡末
の世間意の爲の心もうけう敵よよりくらと
免れり、和焉同志のもの、もうちう敵よよりくらと
山林に入ともうう檀摩供役しこも家の姓難を
げつてたぢまちまち男の方の病をけ一方薦を便に行ぐ

捨置に曰不從郡のあひにあハ取とソナリとが
シム安ハ多モトアリヒタニ有貴の者ノヤヌニ入有
チキリ一ト草リテ一歌甚園歌を以て自と休ミ
ミテリテ一人の女をあハ水をあハ人ソナミ張
ミテ急大あらうと水ミリ万民大疫ヒシナキモ女
をほきく矢々声ありと曰我住方ハ遠山にあり
て山上の宿有海、我人乃ありハ足レハ相ミる
との事アラカリはありとも五年也て生老死大死也
彼也五年と御もくみ五年也。女とモリトもあ
とも而れトモカマクアヒキアと云史のとけ流

を被奴、泥モソシヒテ泥の面モ阿闍梨也の泥モ
戴衣の風也ナシテモアリの如也ナリは名よりと
トモアリ也幸ヘンアリ言もアリ三日一人の床
身アリ寝也と寝マリけり傍小ちり衣アリ半比
丈也大起アリとテモアリ書トカクモは書モ未曇也
トモアリ半にそけこたアリモヤモシトモアリモ
毫無也アリ前也アリヒナアリトモはトカモ阿闍梨
さくアリスルニ他と泥の面モ未曇也アリ身もアリ半
モテ泥の面アリモアリもアリヒドの身アリヒト出ら
うもモキテアリモアリヒト出ら

巣木と弟モロにむすりす

七所社社主 法華寺の法事あり 法華寺縁起書
身は又七所社社主 法事あり その出逢無事也 世に傳
大吉大寧二官主アリ 行善苦難也 然てくは山中アリ
聖人の老翁ニ又モトカラ翁トドリト どめ未トヨイ
アリテシハ行善苦難の事也モトニ行善主ムシラ
言ふもセシムトクニシムヘシアモモキモモモシ
所ふ後トテは②小無事也と眞てあまかとの事アリ
ツツトお園の篠籠にがし 亂木に色別篠の如キ
萬葉の行現也アリモア七所社社主也

往復應の因縁より門を出るの意をもと、勤清
とよきとて七所の精祠を參す事あり。ものほ一
りのものと云ふ事可と、是より遼喜院の神名碑
碑と云ふ御社は、御社の事もたれかと云ふ事
法花の精祠と号及古代の大社也。丁情也。

已もと來古材、お松門がいま、此心も身も文
まあ心も二事也。御社の事もたれかと云ふ事
史本年

ナシ、ノム如若の、心も身も文
為者有

仲實

アキシノハルモニ、志道の漢ノトノ取
徳巣、己もとの瑞大師、ナシ
已もとの報喜寺古精祠、ナシ、奥アリ、ソヘ、萬葉
太極堂地、ナシ、ソヘ、も商時、老子改教者をいか
に引、小鹿足寺、寺セキミ、ヨリ、の御紀通す
安源社、曰古老の傳、アリ、史、萬葉、萬葉の老
つ古化純の秘焉、ナリ、も、あらじ、河墓、萬葉傳
を、の舉、小鹿、アリ、ナリ、而、御堂を建佛、通、萬葉
を、の後、奉祀和焉、又、山乃空庭を、主として、入室を確
て、行つて、達三才者、アリ、其國人佛教を行ひ、

まことに今すこは拉キ天皇の御子傳承大河村義の日
けよの高座をとくちるの尊を少禮て苦難連れて
くふうへりてまをあらひてゆきりて唱えあり止
とみよして峰但かもの身へきてに宿頃の身やく
まゐ小あそび佛國のあらへて極樂の身ふくま
せたりも中おもじく佛頂の奇ありを拂うり則是
ナ一物のうなぎをすくめ兩色の身をといへも眼肉を
とく祥うりあらへにこそ要るまこと忍耐してひと
もの老翁にあつたりあやつる老人まで向ひて是
古色の和服房神の不都うつむかし光くニ瓦金風の

かず一宵伽藍をまく佛像をあく春秋ノ御殿
火災もありて梵國をさへひじ歸律是常悲
うさくも不うり和尚えありひづらに今うり時
分身を併國をいどみ群生を利益すて大歡喜す
て撫ま、更泣を苦て面白ひの如無事りと云ふと
をもくろうりあつひのうとく星異人さんやあ
ふの法寺うるふちひてとくときふくらく大はら見る
の是本と角く彼佛名をあくとて妙体を以て
法相をあせり又爲火にて伽藍を焼かる慶也
安立せしむるの樹木を切る七石と門にうけ

て隣のあもハ坊の僧金をうつて大通と行ひて僧八
坊とまも庵ちへおこすまほと龍虎院あま寺坊岩事坊
坊中坊安あ坊まくまよ井中坊金賣坊雲坊
多くありよりよか入法まよまく法もあらひひまそ
伽藍もくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
にゆく時年にもよく事金を十箇の間はほるも
金はえ法守乃社役と達て十石桔梗とす右より
里にまづはきを仰ぐ南に鐘樓一層を組く左側の佛
堂をほり東に塔壁一基とひじきて右や多宝は二佛
を安置す而新坊と仰ぐて西の坊と号すけむた坊

と御方釋子塔をとて、湯涌をとて、日暮に
壇上に絶巒を造て一千余キトナリとぞまゆを
安立す蓋ほん花も石造も油彩も安樂寺松尾寺魯
も名高寺比一文衆とくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
恒歎勧り長日の渡ア他坊堂の役事に正比達傳
玉家の修行法守の法事毎日の清供至夜の禮り互
ふかくとも一不近身の僧とを有し常歎勧り
の信籍人とぞもまよ

卷八十九終

輿地志略各卷八十九終

道江玉堂比志圖卷之九十

卷之二

卷之三

下條湖村 中ノ御村の南小あす村より堀村を分村
と云ひ西ノ村を須湖の水の邊に立つ。今(天正)の

鵠湖

下緋湘村の西山あり或下緋湘元館

は仰るが余要の事などか第里南少拾人町東面大町

卷之六

五

13

行乞金水之都，却与乞儿争施，以至失意。

是シテトボ鳴洋附金の役様用に御内閣の人に送
達の事と最も多くて一遍半のままでに神代ノアモ
况湖のものと以て爲事と達ちの後を又爲生の者たるふ
ち湖のま十倍もあり一足と下ても思ひとぞトニ卫
山のことをまもく御の西と見ゆけ時を無事に學方
のうへあとも豈足とほたつて及んやまと
ほと車と見ゆけ爲事の画影子似テキモ色
金剛にて自らの湖ふと黒鷹有カキナシ漏
自』と地主を説く湖とるの理叶がく大約り
湘ありて主傳にあとの小舟とまへ自往來とふる

五ノノ假名書也。世古ノ上等をも金古ノと書多
文字大抵東西也と考へるゝも御中御御殿
等々一鉢を食の元を御終小膳と通じて木
と竹に物と食せよといつて

一
金剛浦 金剛の水をとる或金剛の角の金剛乃
入念とし。修了

金剛集

浦野源

一家多んとくの浦國之子孫也。多く有也
史本集

にいわゆる入の段も月日も未だ見立

多題

き處は鳥のす。おもひとみの入はるる處
一 金剛川 或は尾上川とも云木尾上村を磨る故小のみ
源鎌田に生れに金剛川と号す源二下條湖にも東
小流域も有小鶴一柳原川と合へ是處と大岩と赤
尾山の麓を遠見西小川有小流域改めの事と傳
西河内村改鷺村乃而とて赤小川一源尾河内村
の東南を遠見乾に流を種所は多の南を過る尾
上村を磨く湘水に入尾上村を清井郡より
一 柳原川 源然若水池河内と有り本に源首小

朝ト桂坂村柳原村の西と磨く天神山の北を西
朝ト小金剛村有小鶴一金剛川の支流と合へ
金剛川とも引く湘小入す

一 岩砾山 金剛の東小川と號す勝山の圓鏡の日

ちと左とほえり

一大岩山 岩砾山の山小はける山す勝山の圓鏡

の目付川 潤平院並河引多病と號すハケ

一 中門川 漢名大岩山にあり天正十一年四月廿六

守川印多病志津と號す勝山と山國分寺多子也
不波良之佐久間慶政等行清秀院行法少義

威名漸盛也其餘雖有軍功不遑枚舉十一年三月秀吉使清秀為此城守將押柴田氏時北越魁將佐久間玄蕃允盛政卒數萬兵圍此城急欲屠之攻戰聲如霜霆響天地然清秀膂力絕人沉勇有大略更不屑之力戰防之故城中堅固也高山右近雖在側若與清秀不并力且不及一戰而敗走所以敵軍無勢競進欲拉之也清秀閤門出戰故敵退奔三町餘敗軍七矣進亡遂北搏殺不知幾數百人清秀又被三創故家臣諫曰自裁清秀曰汝不知乎於今日之鬪維授首於僕卒我何辱之乎曾聞雖為一人以滅

敵爲勇士敢不肯委家臣引退其袂清秀奮絕不還
復追敵矣凡突入敵九回然衆寡不遇見其遂不可
勝歸城自殺亨年四十二歲次癸未四月二十日也
舉世感彼曉勇也此雖爲其舊跡年代寢久古塔頽
側予今古于此始々心目如見清秀况其功之偉哉
盍記之乎茲清秀弟五世孫中川佐洲刺史久恒歎
其古塔頽側詣吊曰是歲幸及一百年遠忌何不改
造之乎故予新建一基石淳屠換其古塔云
于時天和二壬戌四月廿日
中川佐洲
歲在庚辰其繪圖南單於淨信寺住雄山記之

一
増峯 大岩山の南端に巒の東の尾原をもとと有る
トトハアカム。

一
駿嶽 金剛の西山麓ある山であるとも其峻雅
あり上り下りするに野原三上とよばれる。柱
谷尾の坂接する傍背の谷皆山中の小名なり。宋園傳
少納川の名す。又く鐵田信孝及瀧川一義とも合
秀吉をうへんと欲し近に海をも張す秀吉島は此
地ふかく宋園が生神佑ノ内立馬免を慶びて號中川
多羅御守。秀吉の子秀石川多羅が秀象と名ひ徳
次市松正則が秀象云甚有卒野精平長泰院相助作畫

座偏取甚内安藤糟谷助を區すハ人吉にて今は箇勢
を退く窓巣すせに是モ志緒七本猪口の凡吉那
闘に治セシムタ一のゆきす敵小一系源等の名ありて
竊ト持モト秀吉ト命をもと基成功ありトハ人
多リ御毛トモ多々今ミテ走達て難死也トソシ世ノ事
除セセキ本院ト云長無ノ為也漏セシ人アリテ御史
大將の士卒の功と意もももももももももももももも
臣下令ト治セト入をもりと衆、ぬまえて奉毛懐
すあらん教セモシテ秀吉の小姓は父
に取リて大姓多有テ御少人近侍も多矣

之爲將監津々立處に窓巣と高倉と爲津々立の當
功のするト一書小塗と入るとの多食多う御だせト天
令より置脱レテトセキモ年の廊とあらうと大邊
事多ハ人よに因ムアラホ入トシクアラモテ
久経ト勝とト、鳥井セキ塗とソシクヒテ今乃ニコ
モトヨウモトモト黙黙ハセ塗と往セトシテ多
考レシトケハ肩とヒムテ、お城と勝子縫トアシト
ち候の後小山ひ基行秀と秀良をりとく松金と達亮
人ともう角白髮の老姫妻ひ基行秀と高倉と達亮
と達亮とあふも半渡神とく人被けとの勝子

たまに勧め難むと、一人の猪翁を角の獣推の如
きをかゝりもよきと黒崎寄の地を居りて善人
陽穂と經せし事も勿れとて思て云ひゆる是の後
猪翁の是れ不動庵の不徳あり積金を遣してゆ
くと謂ふ。たゞ、玉体も独鮮に壁間にて風呂水桶
吟一茶生原業を人志へ則ばれかく考うる
は、一朝、御宿あく三度、一日月、やまと伊勢
斜らす。歎國あつて、重き御連手の御氣を天風
御小又人言四十字を原天官のけう以て種の奇

御と通じてはくすに照松上人勅を以て天年を享へ
年、某刻よりかきくあたる在天宮の内室に神燈の光
に至りて彦摩耶小源乎源乎と曰。是乎。是乎不
の高きを仰ぐ角乎にち並み。阿遼源始の多尼足音
相度の昭彰あり。法乎足跡跡を也。是乎利
時人室立候九代。又天皇の御宇。寛年冬年勅使
之て菅相本真の贈送をかへら。他齋靈と云
厚候隆盛を承。年々桂乎多幸。是乎まつ
ハ言ふをもめて、之院を移す。都年。内院を表。セモ
の場合を立。同基上人。湯殿のち院應絶して絶す

廟上の印後年を経て相承。下は佐竹家。院を
盛徳院と号す。菅相亮の坊令を位處。而し西
坂二十金町の舊小金別方士の様。而て菅相り年
の額を掲示。いざひよ大金も。称す。菅相改。大金
少。菅相。も。号す。年。又人。寛年。二代。村上天皇。清
天慶九年。白山。佐多。少。理。桂。院。天慶天祐。勅。行
上の三社。小金。而。五所。樟原。下。菅相。久化。の。像。祖
石。年。一。余。ゆ。典。八。袖。用。缺。二。經。り。も。灌。行。の。樟。原。下
御。室。是。至。淡。金。往。小。納。行。義。是。人。寛。八。袖。代。能。院
清。寺。院。上。人。万。里。の。風。波。と。清。く。入。多。年。人。寛。九。代。度

宇多院の御事、遠源元年、宇都と湯ノ所の七年余
きの御事を納しはる處の額もす昂り筆頭はは大と
是太風也のまじり故木牛とあくと木と開上人運化
の後波西畠の羊塚不到く其形岩と化し今にを詮
咱の院を教かるはを書きてけ經御小納院足
人足八十歳を凌波院の右近江守池山より此の美能小
して度院をもて波波弘法大師と云ひ其を勧請し
坐早寝苦と被教え法事の驗を顯。岐比翁、鳴喜
立能天女を勧請し薦すを是へも三代以上の御懇請
タリ仰ぐの湯島院立能社とあり云々相の傳承が申
丹生の神社是なり

少般ちらず仍く和也とくらゆの御記件のとく
平野表 坂口木手の方をあり
平野の神社平野表をあり
私裏森 田所もあり七手をどき
丹生卿 上舟生下舟生若益國产少室寺奥野
甲至尾羽利上九村と丹生卿と云金剛莊の角子
下舟生村 中卿村の東小舟である村なり中卿四
十九町あるタリは村七八控れタリ既而あり
下舟生大野神社下舟生村をあり延喜式神名帳下所總
丹生の神社是なり

冉生村　ト冉生村の少生村ナリト冉生村ナリト冉生村ナリ

町有馬家も亦到着

菖蒲村　冉生村トイ少生村ナリ冉生村ナリ一村聚

八十軒あり

洞喜院

菖蒲村の小山ナリ耳説。古事記。正斗ナリ。正
音山洞喜院。覆毛禪也。通す。境内。辛國人。四方佛殿社
院。寺方より。豪禅是大庫裏。宝善文庫。達禪也。あり
。寺東下三手にて近は。木の傍。經列。ナリ。辛紀。當。あら完
山。老松高。禪ハ天園。如仲と。草す。至。宝善文庫。商。あり
。湯を。御。之。塙。庫。後。シ。來。ナシ。首。額。小。飯。保。一。菴。を

樂。付。大。中。元。年。庚。午。丁。未。年。正。月。廿。五。日。
聖。本。今。に。座。禪。不。更。除。之。由。本。の。老。病。ナ。レ。也。信。傳。之。
如。仲。移。之。公。宮。也。ト。二。歲。不。禪。と。而。之。冉。生。名。入。往。
之。一。里。金。ト。菖。蒲。村。ナ。リ。而。之。小。野。朝。秋。の。老。翁。急。
脚。之。之。急。之。急。之。急。之。急。之。急。之。急。之。急。之。急。之。
衰。動。之。體。也。體。也。體。也。體。也。體。也。體。也。體。也。體。也。
故。之。時。之。流。水。之。多。而。感。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。

四戸村也。少原村のゆたり

少原村 萩原村のゆゑある村なり 一村二十戸

高木村(?)若木村(?)を宣あり)

鷺貝村 国テ村のゆゑあるとあり村なり

鷺岩村

鷺貝村(?)岩篠(?)大原(?)おは古者(?)
石原(?)に山ひらす御(?)御(?)往來(?)旅人(?)とやまと椿松(?)
吉定(?)村教す後継(?)と云

針川

甲並村

国テ村の東少山(?)あり村なり

庭羽野村

鷺貝村(?)東少山(?)あり

奥地志男(?)卷九十枚

近江國奥地志男卷之九十一

伊香郡第四

杉野村

大箕(?)村の東少山(?)村(?)石田三成先生(?)

金井多村 杉野村(?)東少山(?)村

鎌倉八幡社

金井多村(?)土佐(?)源氏(?)

高木村(?)

昌山(?)櫻原(?)日村(?)か(?)村(?)金井(?)石村(?)

一里(?)川(?)六町洋(?)皆(?)と(?)と今(?)を(?)廢(?)て(?)
土佐(?)古(?)古(?)高(?)金(?)の(?)人(?)つ(?)此(?)地(?)か(?)と(?)

協とすけとあめりとよ隱食矣矣と化せらひ左を
すへ

一 筑前在 中の内桂坂大谷行是卿十二村丹生卿九村
以二十四村をり

一 虎杖越 中の内村より趣高虎村より道行す中内
村より國界一里半國界より故不今三重也
一 中の内村 近江國の山極より村也此村より故不今裏
まで一里ゆなり

一 椿坂村 中の内村の南一里十九町有り中内椿坂
の字す古所洋上に植なり中内の方を坂と云ふ

一 柳原村 桂坂村の南に柳原より椿坂より二三
町洋小段なり

一 関所 柳原村より改り公儀北國所也
吉良源主井伊氏の領也凡多狼閑所也雖支柳坂
也士二人立十石税也畫役八人組杜持人なり多往
來の功也桂浦矣名也傳此平野三家吉浦家老の
常利也

一 守尾山 柳原村の西大峯山の北東より山より志摩縣
國の日葉田勝家陣地の所也故名也行市參すて

一里館中ニ有リ候事ナリ

樹谷より　中村尾山有る山ナリ志津御園城ノ日
付ニ立チ生金成立年ハ嘉慶ノ五月　禁園徳宗重慶毛
叟徳助義元之地也　中村尾山毛叟徳助毛叟徳
井村徳宗人也　十二京トして徳宗はては尾
徳乃也形一萬石と從は玉雅信子アテ古風と云田
主なり徳宗忠次掌く天正十一年秀吉禁園
徳宗と争戦アキラカと驅て退かと走之徳宗毛叟
徳助徳宗謂て曰争也アキラカ　信君アキラカ秀吉
毛叟徳宗も万石返ヘ一秀吉の兵四面アテ禁園徳助

徳宗アキラカの脚帶の馬鹿と掠て自ら也て曰徳宗
記テモイ今トモもて都年ナリ身自裁ナリ九十四歳
不の者歟と報せやうちの者徳宗とシテ世の人等と
鬼葉國とソシヨハ被葉國と云々様而御名ナリ因
ル今日死を受セんといひ畢て板十枚をまつて斎戒後
左ノ門で徳宗送きて北の庄へ歸るゝと傳ナリ鳴ゆ
秀吉アキラカナリ徳宗。軍士三千を以て斎戒以
あら、往とナ次との程一徳助弟身を以て毛叟徳
主君として万石と一生のちを過むことを切莫大ナリ
寧子勇士の姿矣、神國の才人の多く重きをナリ

詩文と觀腐儒の如ふるを以て結物。功漢の記憶を
一紀後も重陽乃至闇と解て之に代て死矣。記信
此はの事跡を以てかどまん。樊噲因私以つて事主を
撫うて下を保た人や四百年の春を起さるゝ。寔之記信
ゆすよりより故言もしく遇漏も。彼ノ弟死し。廢
の天下を起し。是ハ死して暫时の命を脱し。甚忠
臣の孝。一つ形ノ行を事。其不幸を以て漏せん。や劉
邦の天下を得。その紀信ノ功。而劉邦の幸。猶家
勢と共存し。や。樊田の微運。而後財有り
ケン。ゆく。ゆく。活世の日。紀き。馬。り。喧々。私也。

さて全て淮。干城。清。空。云。もの。り。ん。や。私。ま。と。
わ。わ。の。様。形。く。と。考。了。被。給。て。審。良。を。考。ま。と。
ま。と。廢。と。の。こ。う。ち。と。え。す。す。も。大。將。の。任。と。ほ
き。く。意。と。こ。く。つ。あ。や。な。く。鳴。名。徳。勵。ナ。く。

柳原川 川幅五丈许。深。丈。水。か。川。下。そ

考。会。ま。よ。ま。

一倉松村 沖ノ力社。紙。し。江。川。柳。原。村。と。載。名。ノ。称
村。出。柳。原。ノ。里。一。里。國。界。と。い。轟。賀。四。里。半

大。谷。村

柳。原。村。の。高。い。れ。せ

一大。谷。 大。谷。村。乃。而。す。ま。や。志。庫。繩。國。の。日。不。破。夷

三陣夜をすすり

一別てひ 大谷山のほき志摩嶺、國の日連卿立生
一陣夜地や

一林谷も 列所のほき志摩嶺、國の日連卿立生
一日毛受勝兩陣取り地や

一山寺山 林谷との西山の山なり志摩嶺、國の日原
一隆列左席の所すすり

一片園卿 今市 東野 國宴 池原 文宗
八戸 川並 伍浦 山利 中卿 下金網 佐口
又上十二村を云全加莊の内や

一一今市村 大谷村の南下木村
一一狐塚 今市村と大谷村の中方さく山志摩嶺、國の
一四日ち一日れ於猿島人松を押絆するす
一五東野村 今市村の南木村
一六古城徳 东野村東の東れ山の有志摩嶺、國の
一日施文を御秀政陣城の治すりとす
一七國安村 今市村の西山の有村え柳井川の西
一八有村すすり

一九天神糸村 国安村の有村え天神の社を左の左
二〇時急天神社 天神糸村天神と右葉玉行

一 沼原村 玉安村の西へある村也
一 沼原山 沼原村の西より山や志摩嶺巖の山也
斜年立陣地也

一 中谷山 沼原山に付する有之志摩嶺國の山
弟國又た生立陣地也

一 行市峯 中谷化原との山を名づけ志摩嶺
山はもみうちむを津ノ嶺とすし東野行一^{キヤウ}傳
ナムヘ名づく今之行市比文山作志摩嶺國の山
伍人同言著陸なり地也

一 文室村 國安村の西より山也有村也

一 文室山 文室村の西より山也
一 堂本山 文室村の南より山にて大板山ともいふ但
一 堂本山と通じて修る東野嶺あり通義の城也
志摩嶺^{シマカミ}の日増酒窓在志摩の本村隼人所也
一 児戸村 文室村の西南より村也竹附の山也
あ付也

一 川畠村 竹附の西の河有村也
天滿天神社 川畠村にあり多有神社天滿天神の事
神記うる経記とぞは之紀う曰昔別御の箇名を名付
て相如大史と云天渠雅纂にて易常代人丁矣也一日

事事はとも御年と生て江水に遡り西へ傾きゆんと號す
と船を柳下に泊く室中へおきて樹乃にかまくらを
のこす而ひておれとひく是あまく、葛涼輕羅の絃衣
をうなづいてゆんとぬるて莫女を人けられ大丈
の杖とよて曰云の今懐にまろすの本を是妄ゆをす
金井湖水の底をとひて毎年一たびものほほを喜雨衣
をうきとまへ天子ゆり年ゆきりは色あれと歸つたま之丈
苦て曰ゑまじれとあは秋天女たまくへひまで曰喜天子
ゆくゆく一今とう渡云うまい坪暮れとまづく承く美
第を幸とせん云哀情とたれど大丈是をあらはづく

初秋、男ふと生葉賀河ふにて美多軒多一丈席上
頭毛絶つて更衣後て計へし日史帰おぼて日羽
衣久々極半納てかく原義く蟲換ひんかく其筋
天丁曝けんと箱と窓て衣形と多喜多の間をうみ
時々毫毫と天衣とと見ておもと被ふと次大丈おれを
見て壹と考て身を入を向て歸女被衣と見て身を
忽ち自立力とちくと虚空のうる流石三年の老了初
稚の男息毛根を從ひて大丈却思毛を奉る點吹付
利志ツツシテお見方す遠て承手決と取引たり
むかで大夫年來の念清夢と寺の真寂揚河園梨屋を

あまで大夫の家に入て禮を受けて即日おで以れ
おひでそのもつとき半四歳のやう三日とくち元ゆ
寺まほはり来て因りて寺に入れてありて性を放醜にして
八年といふ林門の多きを改て秋の日暮るもせすに取
え乳あひし小綿やふひしぬやくしきをも著年老
至るが事例の御本よりあると教は曰余故つらも來ばく時と
えんしゆるゆきの御本からほんや相加の家と為る
して次丁左近ともて酒をくねるが故いよし等とも
之於て彼少まと見ても感極としてひそむるれ
次第持一筆の時既て立言の詩と作て曰月耀如晴雪

梅花似照星可憐金鏡轉庭上玉芳殿 菅山寺を崩
龍山寺大無寺と云菅山寺將知雅の内教の寺と有て
主懇賛の志度とて次左に奉書とて次て四十九坊を建立
して則氏の家を移改て大無山菴山寺と号ひる者あり
自號比額同く法華淨自と号ひ後編と改て承く
はるは後度とて寺の本堂をまた形と多く正門を
其とて是れとて寺の本堂をまた形と多く正門を
り者近江國守のうじゆ織女と謂ふて水河けり
その形とて男行かひて恥をけり天衣とぞたゞれを

たふうにねむ事不とて 頼てこそ男の妻不なとておほひ
ケイムシテナリて年もとなくユクレと 天上へりてお
矣處して帝をのぞ形をも爲ふは男もとをすうりたる方
けふ又いかく天衣にてとせりより多様にせゆひて
支をもてぬりて多様にせゆうちキリキモアカム
用うてゆれども何りけりとあらず 七月七日志とすり
てけうみの本と陰毛とすらじるべれひまつへとて
あるきの御とあらへるかとく 無去山初參と苦並相引と
よおとも乞りて次輕妙樂也とく信次へき書はる
次第たの湘キリとあまえひゆふ天の御衣御座んやと

記せし所事を詠せばあら被ひは神せしものを文殊
用ひてゆき事多し 菩薩禪 天と下階とをとソヒモ
姓氏詳解とんあと云傳説とくから相細大丈夫と後
をとへ天女とて天と亦世界とて男女たゞめどとく
よしとよたる虚言形 里取とて不とあまくも
候へるにほ子細とく 天女天人との序て不とあまくも
のくらひと取せしをいづかは體を破して免むたゞ
あまく相細大丈夫とくとめづくから事はれり大丈夫相裡
の姓情したからかれたる半故ひか一 菩薩禪と天と
後を人下の原葛原系圖と考は葛原和天德日今

トシヒ命十二世の孫可元乾飯根命の裔野見宿禰土師
の歿と稱て天彦元年史えに天皇士師の姓を改て若原の姓
を猶もとそれより叔代が後して後五位下文部省侍士を
若原と申す也傳氏と要て若原相を生西御津の道家子
ハニ乞若の四男なり知若と云ひ兜と云母ノ昌はるゝ若
神れ光侍と若若の一男ともと若原日記若氏源紀紀若
氏官位昂進源若氏極矣紀若家文革も久祐紀相細
大夫の説も取て天彦きりとくふ説も取て一葉記十二年乙丑
ヨリ方と見えたり若家文革暦傳と云書より土家家の
幸多と云ふ言の南庭梅樹の下に天彦きりと若若よりて

子と申すにせよも不穏の説聞へて原河内を蒼生天神
の御起し初子天子降臨すと幸運取ると云ひ都
送す乞言をして子と原葛五相是之左に葛生の文書を
書き小走へ一等地に若並ちイ葛圃の葛山ちゆ
是とみて葛家出生の地とせらる名は迷漫あり古有
城を葛家の旧姓なりと考へて次天女羽衣の事へ及北
の事也得て以て云ふ事也語ら國三保の松原
の二女は皆業者庵の羽衣と云ふ詫曲所ア人等
勝負史丹後國比活の頂の井と天女下りて羽衣と號
名せし原の羽衣と云ふ號ア又佐々木大膳大夫

天女アメノヒメの衣アマツコは深タマき紅レバあひ羽衣アマツコアマツコ 天を
妻アメノヒメと夫アメノヒコは伊勢國イセノクニの天アメノヒコの御衣アマツコとて
天アメノヒコと云アメノヒコ今アマツコモ尼子アマツコ作アマツコとシ西土アマツコシカフハ傳說アマツコ
里アマツコアマツコ 棲神アマツコ活記アマツコ德章アマツコ新縣アマツコ縣アマツコの女比毛衣
モアマカクアマツコして妻アメノヒメとせアマツコ一說度雲紀アマツコ後紀アマツコ七
月アマツコと秋アマツコ天アメノヒコもトサ相如大更アマツコ年アマツコと固アマツコト也傳因
キ事後アマツコ吟海アマツコ四萬アマツコ一天地形アマツコと考アマツコて天アメノヒコ上アマツコ
世アマツコ以アマツコて天アメノヒコも而アマツコ彦霜アマツコ君アマツコの如アマツコトうんと口アマツコ
ナシアマツコ也アマツコ

一
白木表アマツコ川喜村アマツコ乃アマツコ金剛アマツコの西端アマツコ

一
白木光明神社アマツコ白木裏アマツコ中アマツコノテ多葉アマツコ多盛アマツコ鶴
子アマツコと新羅アマツコ大明神アマツコ是アマツコ新羅アマツコの文字アマツコ志良
ホト利支アマツコ白木アマツコ文字アマツコ志良アマツコト利次アマツコ利アマツコの日アマツコ一
之アマツコ而アマツコ今アマツコ白木アマツコとま次アマツコ

一
大杉山アマツコ川喜村アマツコ八戸村アマツコ西アマツコ川アマツコとナリ文宮アマツコ
ウナアマツコさの白形アマツコ堂木アマツコとアシムアマツコ志津樹アマツコ
城アマツコ日アマツコ大後アマツコ夏アマツコ八アマツコ後アマツコお藍アマツコ五アマツコ神アマツコ白形アマツコ
足アマツコ海アマツコ川喜村アマツコ西アマツコ川アマツコ共アマツコ足アマツコ海アマツコ也アマツコ老アマツコ
也アマツコ津井郡アマツコの境形アマツコ頂アマツコ上アマツコ表アマツコ藏王檜原
の石像アマツコ左アマツコ檜原坂アマツコとよソノ左佐云牛アマツコ牛アマツコの石像アマツコ

時之山石像也。以爲其形狀如老翁耳。——四

佛說是法門之甚深者。古有西漢董仲舒之
易經傳記。亦云。聖人作易。以垂訓于萬世。

正原寺 川並村の山腰より 禅宗佛龕と曰ふ
と申すが、蓋並河谷の近傍なり。ちくに茶所あり

少傳書亦至次古芳西法寺日佛弘之云

佐倉村今葉色浦の少極の名に有村之姓號り南比
鶴坂を越て久村ノ付國ミテ名都ニ即一高人
比地ミテ多く船工等舟舶上若松之津之金村平
竹森少く土佐木馬志賀郡也中西教寺住居の

院例よりて毎年五月ヲ奉門入とす日は「令食」と
云也。もとて令食者より、考課修正ノ件を禁せんと
欲し、議價となつて今日ちづて入御のまゝ、令食者と
て貢旅價自負してかづく也。取て支拂皆悉くと
て、差々充當とてかづく。凡てかづく是より、令食者止まつて
ト、其充當金を以て貢旅價を充當する。今後貴へ止まつて
ト、其充當金を以て貢旅價を充當する。故に入基處止まつて
ト、其充當金を以て貢旅價を充當する。故に入基處止まつて
ト、其充當金を以て貢旅價を充當する。故に入基處止まつて
ト、其充當金を以て貢旅價を充當する。故に入基處止まつて

因福寺
伍爾村
少子禪宗始
生福寺
（至元之末）

亞相君の御差を避て田舎者と云

山梨村 仮宿村のあへ有村

一 中郷村 東野村の南よりは村より西近江行道

河内川並村より是高坂を越て塩津へ此處に中郷村
の山より又峯門山其根より源出ノ丹生の峯也とも
因島也源山より峯名五町許弱て洞穴あり洞の中
深くして石がけたり石色の洞と云東洋山也と云ふ
者年忌戒体供え之洞の中に入暴雨也と云ふ

一 山王社 中郷村より是神日奈大比叡の神や
延喜式名帳に不謂諸總目古の神一社也なるト

參拜毎年七月廿四夜立候確也

輿地志異卷之九十一終

輿地志異卷之九十一終

